なるみ　しんいち
鳴海伸一

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 364 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 言語科学専攻
学位論文題目	**漢語の国語化と副詞化**
論文審査委員	（主査） 教授 齋藤倫明　教授 小林　隆 教授 千種眞一 准教授 大木一夫 准教授 甲田直美

論文内容の要旨

本研究は、漢語が国語化して副詞用法を獲得するという現象、及びその周辺の関連する現象を取り上げ、個別の具体例を考察することを通じて、漢語が日本で独自の用法を発展させること、および、意味変化としての副詞用法の発生、という観点から論じた。

日本語はその歴史的な展開の中で、中国語由来の漢語を体系的に受容してきたのであるが、この日本語が体系的に漢語を受容してきたということは、言語接触の問題として捉えることができる。この言語接触において、文化的に優位であった中国大陸の言語を、日本語の中に大量に借用することで、日本語の語彙体系を豊富にすることができた。日本語における漢語受容とは、日本語と中国語が接触することで、日本語の体系の中に中国語由来の語が浸透していく過程として考えられる。

その漢語受容とは、いってみれば、「漢語の国語化」ということである。それはつまり、日本語の体系に都合のよいように漢語を体系的に取り入れるための仕組みの工夫と、それによる日本語内への漢語の体系的な浸透の過程であり、また一方では、和語にはない漢語特有の性格・性質を利用した語彙の再生産の過程でもあるといえる。本論文においては、このような漢語の国語化という現象はどのようにして起こるのか、またどのようなパターン・プロセスがあるのかということを考察した。具体的には、漢語がどのような過程を経て原義から離れ、日本独自の意味・用法を獲得していったのかということを、個別の具体例に基づいて考察し、さらに、漢語の国語化という現象にいかなるパターンがあるのかを検討して、それらのパターンがもつ国語化のプロセスについて考察を加えた。本論文においては、特に国語化の度合いが高いと考えられる副詞化したものを中心に取り上げた。（第四部　第十一章　漢語の受

容と国語化）

具体的には、国語化の現象として以下のものを示した。

Ⅰ　文法に関わるもの

1、名詞として使用される　2、動詞化（2 - 1、サ変動詞化　2 - 2、語尾を活用させて動詞化　2 - 3、接尾語を付して動詞化）　3、形容詞化　4、形容動詞化　5、副詞化　6、接続助詞化　7、接頭語化、接尾語化　8、混種語化

Ⅱ　音韻・音声に関わるもの

9、音声の変化

Ⅲ　意味に関わるもの

10、意味・用法のずれ、変化

その上で、副詞化のプロセスに含まれる段階の一端として、「連用修飾用法の獲得」「動作様態や状態・程度を修飾する意味への変化」「意味の抽象化」「文法化（再分析）」の四つの段階を述べた。

また、漢語受容の周辺的なものながら、漢語の国語化に基づく字音語の再生産の現象と考えられるものとして、「和製漢語の発生」「漢字表記語の擬似漢語化」「表記のあて直し」というものがあることを述べた。

以上のように、従来必ずしも明確に規定されてこなかった「漢語の国語化」現象について、漢語を受容するためのフィルターとしての側面から捉えなおして、国語化というものにどのような種類のものがあるかを検討した上で、国語化の具体的過程を、特に副詞化に注目して論じた。具体的には、時間的意味の発生（第十二章　時間的意味の発生）と、程度的意味の発生（第十三章　程度的意味の発生）について考察した。

時間的意味の発生については、従来は空間的意味からの転用という観点から論じられることが多かった。しかし本論で扱ったような副詞、接続助詞における時間的意味は、対応する空間的意味が想定できず、空間的意味からの転用ということとは別のメカニズムが働いていると考えた。その結果、「連続的変化からの含意」「同時的動作との結びつき」「動作・行為の継起性に焦点があたることによるもの」といったことが、時間的意味の発生のための契機となりうることを示した。

また、程度的意味の発生については、程度的意味の周辺的なものとの関わりから、意味変化の方向性として論じた。つまり、程度的意味を発生させやすい意味や、程度的意味が含み持ちやすい意味があるという点から考察したということである。その結果、「量・程度的意味から程度的意味への変化」「程度的意味と評価的意味の相関」「比較性からの程度的意味の発生」「形容語の持つ程度性が顕在化することによるもの」といったことを示した。このように、副詞化のメカニズムと、変化のパターンの一端を明らかにした。

本論でこれらの具体的事例として扱ったのは、「次第」「一所・一緒」「一所懸命・一生懸命」「相当」「随分」「むげ（無下）」といった語である。これらの国語化や副詞化、接続助詞化について論じたことを、以下でまとめる。

・「次第」の場合（第三章、第四章）

「次第」は、漢籍・漢訳仏典においては、〈順番、序列〉といった意味が原義であった。それを日本では、平安時代に受容した。原義をそのまま生かした「次第に」という形の連用修飾用法も見られ、当初は原義を多分に残した用法であったが、鎌倉時代に至って、名詞・副詞ともに新用法が現れる。名詞用法において、一つ一つの区切りがはっきりした非連続的なものから区切りのはっきりしない連続的なも

の表す対象が拡大し、連続的変化を表すようになった。このような国語化の影響で、連続的変化を表す副詞用法が発生した。その後、時間副詞として独自の意味を獲得することになる。このように、漢語「次第」は非連続から連続へという意味変化（国語化）が起こり、そのことが、連続的変化を表す時間副詞「次第に」が成立する契機になった。

また、「次第」には接尾語用法もある。平安時代・鎌倉時代において「次第」は漢語の原義としての〈序列、定められた順番〉という意味をそのまま利用して〈～の順番〉という意味の接尾語的用法が使用され始めた。その後、室町時代に入ると、結果としての順序付けを伴わなくても、何らかの強制力・支配力をもって他の行動に影響を及ぼすものについて「次第」が使用できるようになり、〈～に従う、～の通りにする〉という意味を表すようになる。室町時代末期以降、江戸時代に入ると、〈何らかの基準となるものに従う〉という意味合いは薄れ、単に〈そのものの如何に任せられている〉という「相関関係」を表すようになり、現代とほぼ同じ用法になった。それと共に、上接語には名詞だけでなく動詞連用形をも取るようになり、〈その動作の程度に応じて他の動作・行為が行われる、その動作が行われるままにする〉意を表すものが現れる。さらには上接する動詞の現す動作の程度を問題にするのでなく、従属節の動作と主節の動作の継起性に焦点が当てられると、「次第」節全体が主節を連用修飾する形で、〈～するとすぐに〉という時間的意味を表す用法が生じた。このように、「次第」の接尾語用法における時間的意味は、空間的意味との対応関係によってではなく、「次第」自体の実質的意味が失われる文法化が進み、従属節の動作と主節の動作の継起性によって生まれたものなのである。

・「一所・一緒」の場合（第五章、第六章）

日本語の「一所」は、中国文献のものを受け継ぎ〈ある場所、ひとつの所〉という意味で使用していたが、中世には動的な表現と共起するような用法にまで用法が拡大した。そして、軍記物語の「死なば一所」という表現が多用されることで、「一所」自体に〈行動を共にする〉含意が生じた。それが「一所に」という副詞用法が〈行動を共にする〉意味を表す副詞になる契機になった。近世には、行動を共にする意味の用法が多く使用されるが、空間的意味が依然として残っている。それは、「一所に」の〈行動を共にする〉意味は、中世の「死なば一所」に端を発するものだからである。そのため、明確な到着点を持った行動に限られ、結果的に空間的意味が強く残ったものとなるのである。従って、この時点での「一所に」は、ともにたどり着く明確な到着点を持った行動をともにすることを表す副詞用法であるといえる。つまり、漢語として受容した「一所」が、国語化して空間的意味を喪失し、日本で独自に副詞用法を獲得したものということができる。

さらに江戸時代から明治時代にかけて、「一所」は空間的意味を喪失し、その意味変化に対応して「一緒」という新表記が生まれ、定着していった。江戸時代中期までの「一所」は、空間的意味が残っていたが、江戸時代後期になると、空間を共有する人や物の結びつきの方へと焦点が移り、空間的意味の希薄化した用例が見られるようになる。そして、それに対応した表記法の先駆的試みが見られる。十返舎一九の「東海道中膝栗毛」では、空間的意味の有無によって、「一所」と「いつしよ」との間に使い分けが見られた。空間的意味の無い用法に、「一所」という表記を使いにくかったと考えられる。式亭三馬の洒落本・滑稽本では、同様の使い分けが見られる一方、「一緒」という表記も使用されている。さらに時代が下り、為永春水の人情本では、空間的意味の無い用例が大多数になっており、文脈に応じて様々な漢字表記が行われていた。「一緒」は漢籍・仏典に見られるが、それらは、式亭三馬が使用したような用法のものではない。式亭三馬の作品以外にも、「一緒」を漢籍・仏典に見られるような用法で使用したものが見当たらないことから、「一緒」は、意味・用法を含めた漢語として受け入れたという

よりも、「一所」の表記から意味・用法が離れていった「いっしょ」の新表記として受け入れたものと考えられる。このように、「一所・一緒」の事例は、意味変化と、それに対応した表記の交代が起こった事例と捉えることができる。これは、漢語の国語化に基づく字音語の再生産のひとつとしての、表記の当てなおしの例であると考えられる。

・「一所懸命・一生懸命」の場合（第七章）

中世の「一所懸命」は、武士階級が、自分の領地に命を懸けるさまを表すものであった。それを、近世に入って、他の一般的な場面に転用し、必死に対処すべき差し迫った事態を表すようになった。そして、「懸命」という表現からの直接的な類推と、重大な場面を表す「一生の」との意味的・形式的類似によって、「いっしょ」が「いっしょう」と長音化し、「一生懸命」という表現が生れた。近世に入って比喩的な転用を経ることで、武士階級の思想に限定されない汎用的な意味・用法を獲得したのである。そして新しく生れた意味に合わせて「一生懸命」へと語形が変化することで、領地・所領の観念から離れて、より一般的な場面で使用しうる表現になったのである。さらにその後、近世末期以降には、「一生懸命」の表す意味が、「差し迫った事態」から、「そのような事態に臨む人間の心情」へと移り、それとともに「一生懸命に」の形の副詞用法が発生した。つまり、事態のさまを表していたものが、そのような事態に臨む人間の心理を表すものへと変化した例と言える。また、「一所懸命・一生懸命」は和製漢語であり、これも、国語化に基づく字音語の再生産の一つと考えられる。

ここまでのものは、意味変化という点では、時間的意味と空間的意味との関係が問題になっているものとしてまとめることができる。国語化に伴って、原義による、あるいは文字通りの空間的意味を失い、また、時間的意味が何らかの過程によって発生したものと考えられる。副詞「次第に」の場合は連続的変化を表す意味を獲得したことによってその含意から、「一所・一緒」の場合は、結果的に同時に行なわれる動作と漢語副詞とが結びつくことによって、また、接続助詞「～次第」の場合は従属節の動作と主節の動作の継起性、すなわち動作が間をおかずに連続的に生起することに焦点が当てられることによって、時間的意味が発生したのである。これらは、時間的意味の発生するパターンのうちのいくつかと考えられるだろう。

・「相当」の場合（第八章）

中国文献の「相当」を平安時代初期に日本に受容したものの、当初は原義を大きく離れず、動詞として〈当たる、相当する、対応する〉という意味で使用していた。それが中世末期から「相当に」という連用修飾用法でも使用されるようになるとともに、「相当」に、〈そのもののもつ程度の高さ・量の大きさにおいて当たる、対応する、ふさわしい〉という含意が生じた。つまり、「相当」が意味変化して程度・量性のあるものとの結びつきができたといえる。但しこの段階の「相当」は、抽象的な程度ではなく専ら具体的な量の大きさを表し、また、何に相当するのかが容易に推測できるものであった。とはいえ、このように、「相当」が意味変化（国語化）し、程度の高さ・量の大きさと結びつくことで、後に程度副詞化する下地ができたといえる。そして近代に入ると、「相当に」とともに「相当φ」の形の連用修飾用法も使用例を多くしていった。それとともに、量的な大きさだけでなく、抽象的な程度の高さを表しうるようになる。また、何に「相当」するのかが明示されず、「相当」する対象が特に無い場合でも、「相当」という語だけで程度の高さ・量の大きさを表すようになっていった。こうして「相当に」「相当φ」の形の程度副詞としてより純粋なものへと進行していった。つまり、「相当」は、具体的な分量を

表す意味と結びつくことで、そこから、抽象的な程度の高さへと意味が変化・拡大していったのである。

・「随分」の場合（第九章）

漢語「随分」の原義は、〈分に随う、分相応〉であったが、それを平安時代に日本では、国語化して、量的含意を持つものとして受容した。これは、仏教語としての具体的・実質的意味を離れるとともに、分量という一般的・抽象的意味の量副詞用法として受け入れたといえる。そしてさらに、具体的な分量を表す量的意味から、抽象的な程度の高さを表す程度的意味が発生した。量的意味と程度的意味の近接性によるこうした変化は、「相当」と共に、程度的意味発生の一つのパターンと捉えられる。また量的意味においても、具体的な量から抽象的・心理的な量への変化・拡大がみられた。明治時代以降には、単純な程度的意味のみならず、「驚き・意外感」といった評価的ニュアンスが含まれるようになった。程度副詞における評価的ニュアンスの獲得という一つの意味変化の方向性を示し、それとともに、具体的な分量的意味・抽象的な程度的意味・評価的意味の近接性が、通時的な意味変化の方向性としても示せることがわかる。

・「むげ」の場合（第十章）

「むげ」は、実質的意味を外から取り入れることによって意味変化した。「むげ」の意味変化は、大きく二段階に分けて考えることができる。一つ目の変化は、中古から中世にかけての時期に起こった。中古の「むげ」は、〈物事が完全にある状態になること、ある状態であること〉を表していた。比較的好ましくない事態の描写に使用される傾向は見出せるが、「むげ」自体にマイナスの意味は含まれていなかった。ところが中世になると、それまでの「むげ」を、「無下」と漢字表記する形容語として継承し、「むげ」自体にマイナスの意味が含まれるようになった。これによって「むげ」が、〈それより下が無いほど悪い、ひどい〉という実質的意味を担うものと解釈され、「むげに」以外の形でも使用されるようになった。またそのことで、従来からの「むげに」という連用形は、程度副詞的にも使用されるようになった。程度的意味の発生としては、「比較性」の意味を持つことと、形容語がもともと持つ程度性という点から考えることができる。ここで起こった一つ目の変化は、出自不明の「むげ」に対して、「無下」という漢字表記を与えることで起こったものである。それによって、「むげ」自体で実質的意味を持つものとして認識され、その表記に沿った意味へと変化したといえる。つまり、漢字表記によって実体が与えられ、それと共に従来持たなかった意味を獲得するという形で意味変化が起こったのである。本来は漢語であるかどうかはわからないのだが、漢語として意識されるという擬似漢語の例と考えることができる。この擬似漢語ということも、国語化に基づく字音語の再生産の事例のひとつといえる。

二つ目の変化は中世から近世にかけて起こった。中世末期以降に、「むげ（に）」と「むくつけし」「むくつけなし」との混交によって生じた「むげつけない」の意味が改めて「むげに」に取り込まれた。そのような新たな実質的意味を含むものとして「むげ」という要素が改めて解釈され、「むげない」などの形を生んだ。それらの変異形は後世には受け継がれないが、「むげに」の連用形にその含意が残ったまま現代へと続くことになる。ここで起こった二つ目の変化は、新語形「むげつけない」の意味が「むげに」に取り込まれたというものである。「むげつけない」という語形の発生に伴って、「むげ」という要素が、〈残酷だ、薄情だ〉という意味を持つものとして解釈し直されたといえる。このことで、程度副詞的な用法であったものが、実質的意味を再び獲得することとなった。程度副詞化するということは、実質的意味を失う方向の変化であり、一度そのように変化したものが再び実質的意味を獲得するということは、その語単独では考えにくい。「むげ」の場合「むげ」という要素に外から新たな意味を読み込

むことで、そのような変化が起こったといえる。また、二つめの変化が起こった後には、従前の漢字表記はそぐわなくなり、改めて様々な漢語との関わりが推測されている。このことも、「むげ」という語形が、出自不明であることが大きく与っているといえ、「むげ」は擬似漢語として扱うことが可能になる。

ここまでの検討によって国語化と程度性の獲得のパターンの一端を示しえたと考えられる。すなわち「相当」「随分」からは量・程度的意味から程度的意味への変化というパターンを示すことができる。これらは国語化によって程度性獲得の下地がつくられたものであった。また、「むげ」のようないわば「擬似漢語」というべきものも程度性の獲得という点では注目すべきものといってよいであろう。加えて言えば、これらにみられるような程度性の獲得というのは文法化の一種というべきものであろう。そういう点で、これらの現象は、文法化という視点からも注目すべきものである。なかでも「むげ」は、文法化したその後に再び実質的な意味を帯びるという点で「文法化の一方向性」という仮説に反するもののようにも見えるからである。これらは、今後、文法化という視点からも再検討が行われるべきものといってよいであろう。

本論文は、以上のような議論から、これまで十分には考えられてこなかった、漢語の副詞化や副詞の意味変化に関する具体的なパターンとプロセスの一端を示した。それによって、漢語受容史研究や、副詞の意味変化研究に貢献することができるものと考える。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語が漢語を受容する際に日本語のなかで変容し独自の用法で用いられる国語化という現象に着目し、なかでも漢語が副詞としての用法を獲得する副詞化とはいかなるものか、また、その過程にどのようなパターンがあるのかということを明らかにしようとしたものである。

第一部「序論」は、漢語受容における国語化という問題に触れ、本論文の目的を述べる（第一章）。また漢語研究の流れをとらえつつ、漢語の国語化・副詞化研究の問題点を浮き彫りにする（第二章）。

第二部「国語化と時間的意味・空間的意味」では、本来副詞ではなかった漢語が日本語において副詞化する現象をとらえ、副詞化の過程を精細に明らかにし、時間副詞化した語につき、どのように時間的な意味を獲得するのかということについて検討をおこなった。「次第」は連続的変化からの含意によって（第三章）、「一所（一緒）」は同時的動作との結びつきといった過程を経ることで（第五章・第六章）、時間的意味を獲得していることを明らかにした。また、これらの語の周辺の「一所懸命」（第七章）、接続助詞としての「次第」の用法（第四章）についても検討を加えている。

第三部「国語化と程度的意味」では、漢語の程度副詞化の過程を描き出し、それらの語がいかにして程度的意味を獲得したかについて論じている。「相当」「随分」は、国語化・副詞化するにあたって本来なかった量的意味を表す用法があらわれ、それが程度的意味に転じていることを明らかにした（第八章、第九章）。さらに、「むげ（無下）」は漢字表記の影響によって生まれた〈それより下のない〉という比較の意味から程度的意味を獲得したことを明らかにした（第十章）。

第四部「漢語の国語化としての副詞化と副詞の意味変化」においては、第二部・第三部の考察をふまえ、国語化のパターンを体系的に示した上で、副詞化は国語化の度合いが高いものと位置づけ、副詞化の過程にいかなるパターンがあるのかということを検討している（第十一章）。さらに副詞化にともな

う時間的意味の獲得の過程、および程度的意味の獲得の過程を精細に示し、いかなるパターンがあるのかを明らかにした（第十二章・第十三章）。

第五部「結論」は、本論文のまとめをおこない、今後の課題について述べている（第十四章）。

これまでにも漢語の日本語への受容については個別の語史的な研究はあったが、変化の過程やパターンのあり方にまで目を向けたものはなかった。本論文は、副詞化の過程、時間副詞の時間的意味の獲得過程、程度副詞の程度的意味の獲得過程を精細に描き出し、国語化・副詞化のパターンを明らかにした。この成果は、日本語史研究・言語変化研究に大きく寄与するものといえる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。